

(総則)

第1条 受注者は、別紙仕様書、図面等（以下「仕様書等」という。）に基づき頭書の契約金額をもって、頭書の履行期限までに、委託業務を完了しなければならない。

(再委託の禁止)

第2条 受注者は、委託業務の処理を一括して他の者に委託してはならない。

2 受注者は、委託業務の一部を第三者に委託するときは、あらかじめ、発注者の承諾を受けなければならない。

3 発注者は、前項により承諾するときは、受注者に対して委託業務の内容及び第三者の業者名を明記した書面とともに、第三者の身元を明らかにする資料等の提出を求めるものとする。

(権利義務の譲渡等)

第3条 この契約により生ずる権利又は義務は、これを第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。ただし、発注者の書面による承諾を得た場合は、この限りでない。

(委託業務の調査等)

第4条 発注者は、必要と認めるときは、委託業務の処理状況を調査し、若しくは受注者から関係書類を提出させ、又は受注者に対し報告を求めることができる。

(保証人)

第5条 受注者は、発注者の要求があったときは、受注者に代わって自らこの契約を履行することを保証する連帯保証人を立てなければならない。

2 前項の保証人は、当該年度の岐阜市競争入札参加資格者名簿に登録され、発注者の承認を受けた業者でなければならない。

3 保証人は、発注者の請求があった場合は第3条の規定にかかわらず、この契約に係る受注者の権利及び義務を承継するものとする。

(業務主任者)

第6条 受注者は、業務履行について、管理、監督する業務主任者を定め、発注者に通知するものとする。

(特許権等の使用)

第7条 受注者は、特許権、実用新案権、意匠権、商標権その他日本国の法令に基づき保護される第三者の権利（以下この条において「特許権等」という。）の対象となっている施行方法を使用するときは、その使用に関する一切の責任を負わなければならない。ただし、発注者がその施行方法を指定した場合において、設計図書又は仕様書に特許権等の対象である旨の明示がなく、かつ、受注者がその存在を知らなかったときは、発注者は、受注者がその使用に関して要した費用を負担しなければならない。

(秘密の保持)

第8条 受注者は、業務上知り得た秘密を他に漏らしてはならない。この契約の終了後も同様とする。

2 発注者は、第2条第2項により承諾するときは、第三者に対して、受注者を通じ委託業務の秘密の保持に関する誓約書の提出を求めるものとする。

(業務内容の変更等)

第9条 発注者は、必要がある場合には、この契約の内容を変更し、中止し、又は打ち切ることができる。この場合において、契約金額又は履行期間を変更する必要があるときは、発注者と受注者とが協議して、これを定めるものとする。

(受注者の請求による履行期間の延長)

第10条 受注者は、天災地変その他自己の責任によらない理由により、履行期間内に完了することができないときは、その理由を明示した書面により発注者に対し履行期間の延長を求めることができる。

2 発注者は、前項の規定による請求があった場合において、必要があると認められるときは、履行期間を延長しなければならない。

3 発注者は、履行期間の延長が発注者の責めに帰すべき事由による場合、契約金額について必要と認められる変更を行い、受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用の負担をしなければならない。

(発注者の請求による履行期間の短縮等)

第11条 発注者は、特別の理由により履行期間を短縮する必要があるときは、履行期間の短縮変更を受注者に請求することができる。

2 発注者は、特別の理由により履行期間を延長すべき場合において、特別の必要があるときは、延長する履行期間について、受注者に通常必要とされる履行期間に満たない履行期間への変更を請求することができる。

3 発注者は、前2項の場合において、必要があると認められるときは、契約金額を変更し、又は受注者に損害を及ぼしたときは、必要な費用を負担しなければならない。

(発注者又は第三者に及ぼした損害)

第12条 受注者は、自己の責めに帰すべき理由により、発注者又は第三者に損害を及ぼしたときは、受注者の負担において、それを賠償しなければならない。

(検査)

第13条 受注者は、この契約が完了したときは、発注者の検査を受けなければならない。

(契約金額の支払い)

第14条 受注者は、前条の検査に合格したときは、発注者の定める手続きに従って、契約金額の支払いを請求するものとする。

2 発注者は、前項の規定による請求を受けたときは、その日から起算して30日以内に契約金額を支払わなければならない。

3 この契約の締結後、法令の改正等により、消費税法（昭和63年法律第108号）の規定による消費税及び地方税法（昭和25年法律第226号）の規定による地方消費税の額に変動が生じた場合は、発注者は、この契約を何ら変更することなく契約金額に相当額を加減して支払うものとする。

(前払金)

第15条 発注者が、あらかじめ、前払金を支払う旨の意思表示をした場合において、受注者は、契約金額の10分の3以内の前払金の支払いを請求することができる。

2 発注者は、前項の規定による請求があったときは、請求を受けた日から14日以内に前払金を支払わなければならない。

3 受注者は、契約金額が著しく増額された場合において、その増額後の契約金額の10分の3から受領済みの前払金額を差し引いた額に相当する額の範囲内で前払金の支払いを請求することができる。この場合においては、前項の規定を準用する。

4 受注者は、契約金額が著しく減額された場合において、受領済みの前払金額が減額後の契約金額の10分の4を超えるときは、受注者は、契約金額が減額された日から30日以内に、その超過額を返還しなければならない。

5 前項の超過額が相当の額に達し、返還することが前払金の使用状況からみて著しく不相当であると認められるときは、発注者と受注者とが協議して返還すべき超過額を定める。ただし、契約金額が減額された日から20日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。

6 発注者は、受注者が第4項の期間内に超過額を返還しなかったときは、その未返還額につき、同項の期間を経過した日から返還をする日までの期間について、その日数に応じ、契約締結の日において適用される政府契約の支払遅延防止等に関する法律（昭和24年法律第256号。以下「支払遅延防止法」という。）第8条第1項の規定により定められた率の割合で計算した額の遅延利息の支払いを請求することができる。

(前払金の使用等)

第16条 受注者は、前払金をこの業務の材料費、労務費、外注費、機械購入費（当該業務において償却される割合に相当する額に限る。）、動力費及び支払運賃に相当する額として必要な経費以外の支払いに充当してはならない。

(一部完了部分の引渡)

第17条 業務の一部が完了し、かつ、可分のものであるときは、受注者は当該部分に対する契約金額相当額を請求することができる。同一業務を一定期間反復する業務についても同様とする。

2 前項の場合においては、第13条及び第14条の規定を準用する。

(履行遅滞の場合における違約金)

第18条 発注者は、受注者の責めに帰すべき理由により期間内に完了することができない場合において、受注者から違約金を徴収して、期間を延長することができる。

2 前項の違約金の額は、履行期限の翌日から遅延日数1日につき、契約金額の1000分の1に相当する額とする。

(発注者の解除権)

第19条 発注者は、受注者が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、この契約を解除することができる。

- (1) 受注者の責めに帰すべき理由により期間内に完了する見込みがないと認められるとき。
- (2) 受注者がこの契約の履行を放棄し、又は中止したとき。
- (3) 受注者がこの契約の履行に必要な資格を喪失したとき。
- (4) 受注者又はその使用人が検査若しくは監督に際し職務の執行を妨げ、又は妨げようとしたとき。
- (5) 受注者がこの契約又は法令に違反したとき。
- (6) 破産手続開始、民事再生手続開始又は会社更生手続開始の申立てがなされたとき。
- (7) 手形交換所による取引停止処分、主要取引先からの取引停止等の事実があり事業執行が困難となると見

込まれるとき。

(8) その他、業務に着手し、又は事業を遂行することが、困難とみられる事由が発生したとき。

(談合その他不正行為による解除)

第19条の2 発注者は、受注者（受注者が共同企業体の場合は、その代表者又は構成員。以下この条において同じ。）がこの契約に関して、次の各号のいずれかに該当したときは、何らの催告を要せず、この契約を解除することができる。

- (1) 公正取引委員会が、受注者に私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和22年法律第54号。以下「独占禁止法」という。）に違反する行為（以下「独占禁止法違反行為」という。）があったとして、独占禁止法第61条第1項に規定する排除措置命令（以下「排除措置命令」という。）を行い、当該排除措置命令が確定したとき（当該排除措置命令に係る行政事件訴訟法（昭和37年法律第139号）第3条第1項に規定する抗告訴訟（以下この条において「抗告訴訟」という。）が提起されたときを除く。）。
- (2) 公正取引委員会が、受注者に独占禁止法第62条第1項に規定する課徴金の納付命令（以下「課徴金の納付命令」という。）を行い、当該納付命令が確定したとき（確定した当該納付命令が独占禁止法第63条第2項の規定により取り消された場合を含み、当該納付命令に係る抗告訴訟が提起されたときを除く。）。
- (3) 公正取引委員会が受注者に独占禁止法違反行為があったとして行った決定に対し、受注者が抗告訴訟を提起し、当該抗告訴訟について請求棄却又は訴え却下の判決が確定したとき。
- (4) 公正取引委員会が行った排除措置命令又は課徴金の納付命令（これらの命令が受注者又は受注者が構成事業者である事業者団体（以下「受注者等」という。）に対して行われたときは、受注者等に対する命令で確定したものをいい、受注者等に対して行われていないときは、各名宛人に対する命令すべてが確定した場合における当該命令をいう。次号において「排除措置命令等」という。）において、この契約に関し、独占禁止法違反行為の実行としての事業活動があったとされたとき。
- (5) 排除措置命令等により、受注者等に独占禁止法違反行為があったとされた期間及び当該違反行為の対象となった取引分野が示された場合において、この契約が、当該期間（排除措置命令等に係る事件について、公正取引委員会が受注者に対し課徴金の納付命令を行い、これが確定したときは、当該納付命令における課徴金の計算の基礎である当該独占禁止法違反行為の実行期間を除く。）に入札（見積書の提出を含む。）が行われたものであり、かつ、当該取引分野に該当するものであるとき。
- (6) 受注者（受注者が法人の場合にあっては、その役員又は使用人）に対する刑法（明治40年法律第45号）第96条の6若しくは第198条又は独占禁止法第89条第1項若しくは第95条第1項第1号の規定による刑が確定したとき。

(暴力団排除措置による解除)

第19条の3 発注者は、受注者（受注者が共同企業体の場合は、その代表者又は構成員。以下この条において同じ。）が、次の各号のいずれかに該当したときは、何らの催告を要せず、この契約を解除することができる。

- (1) 受注者が暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号。以下「暴対法」という。）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下同じ。）であるとき。
- (2) 受注者の役員等（法人にあっては役員及び使用人（支配人、本店長、支店長その他いかなる名称を有する者であるかを問わず、営業所の業務を統括する者（営業所の業務を統括する者の権限を代行し得る地位にある者を含む。）をいう。以下同じ。）を、法人以外の団体にあっては代表者、理事その他法人における役員及び使用人と同等の責任を有する者を、個人にあってはその者及びその使用人をいう。以下同じ。）が、暴力団員（暴対法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下同じ。）であるなど、暴力団がその経営又は運営に実質的に関与しているとき。
- (3) 受注者の役員等が、暴力団員であることを知りながらこれを使用し、又は雇用しているとき。
- (4) 受注者の役員等が、その属する法人その他の団体若しくは第三者の不正な利益を図る目的又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員等（暴力団員又は暴力団員でなくなった日から5年を経過しない者をいう。以下同じ。）を利用しているとき。
- (5) 受注者の役員等が、暴力団若しくは暴力団員に対して資金等を提供し、若しくは便宜を供与するなど直接的若しくは積極的に暴力団の維持運営に協力し、又は関与しているとき。
- (6) 受注者の役員等が、その理由を問わず、暴力団又は暴力団員等と社会的に非難されるべき関係を有しているとき。
- (7) 受注者の役員等が、暴力団若しくは暴力団員がその経営又は運営に実質的に関与している業者であることを知りながら、下請契約、業務の再委託契約、資材等の購入契約等を締結し、これを利用しているとき。

(不当要求による解除)

第19条の4 発注者は、受注者（受注者が共同企業体の場合は、その代表者又は構成員。以下この条において同じ。）が、自ら又は第三者を利用して次の各号のいずれかに該当する行為をしたときは、何らの催告を要せず、この契約を解除することができる。

- (1) 暴力的な要求行為
- (2) 法的な責任を超えた不当な要求行為
- (3) この契約に関して、脅迫的な言動をし、又は暴力を用いる行為
- (4) 風説を流布し、偽計若しくは威力を用いて発注者の信用を棄損し、又は発注者の業務を妨害する行為
- (5) 前各号に掲げるもののほか、市が発注する業務の受注者として不適切であると認められる行為

（予算の減額又は削除に伴う解除等）

第19条の5 発注者は、契約期間中であっても、この契約を締結した翌年度以降において、この契約に係る歳出予算の減額又は削除があった場合は、この契約を変更し、又は解除することができる。

2 受注者は、前項の規定により、この契約を解除されたときは、発注者に対しその損害の賠償を求めすることはできない。

（受注者の解除権）

第20条 受注者は、次の各号のいずれかに該当する理由があるときは、この契約を解除することができる。

- (1) 第9条の規定により、契約金額が2分の1以上減少したとき。
- (2) 第9条の規定により、中止の期間が履行期間の3分の2以上に達したとき。
- (3) 発注者がこの契約に違反し、その違反により完了することが不可能となったとき。

（違約金）

第21条 発注者が第19条、第19条の2、第19条の3又は第19条の4の規定によりこの契約を解除した場合は、受注者は契約金額の10分の1に相当する額の違約金を発注者に支払わなければならない。

（談合その他不正な行為があった場合の違約金）

第21条の2 受注者は、第19条の2各号のいずれかに該当するときは、発注者がこの契約を解除するか否かを問わず、契約金額の10分の2に相当する額を違約金として発注者の指定する期間内に支払わなければならない。ただし、第19条の2第1号から第5号までに掲げるもののうち、決定の対象となる独占禁止法違反行為が、独占禁止法第2条第9項に基づく不公正な取引方法（昭和57年6月18日公正取引委員会告示第15号）第6項で規定する不当廉売である場合その他発注者が特に認める場合は、この限りでない。

2 前項の規定は、この契約による履行が完了した後においても適用するものとする。

3 第1項の場合において、受注者が共同企業体であり、既に解散しているときは、発注者は、受注者の代表者であった者又は構成員であった者に同項に規定する違約金の支払いを請求することができる。この場合において、受注者の代表者であった者及び構成員であった者は、連帯して支払わなければならない。

4 第1項の規定にかかわらず、発注者に生じた損害の額が同項に規定する違約金の額を超える場合は、発注者は、その超過分につき賠償を請求することができる。

（違約金、損害賠償金等の控除等）

第22条 発注者は、受注者が違約金、損害賠償金又は延滞金を契約金額の支払時までには納付しないときは、発注者は当該契約金額のうちからその金額を控除し、なお不足するときは、更に請求することができる。

2 前項の請求をする場合は、発注者は、受注者から納付期限の翌日から納付の日まで遅延日数1日につき契約締結の日において適用される支払遅延防止法第8条第1項の規定により定められた率の割合で計算した延滞金を請求することができる。

（不当介入への対応）

第23条 受注者は、この契約の履行に当たって、暴力団若しくは暴力団員又はこれらと密接な関係を有する者から、事実関係及び社会通念等に照らして合理的な理由が認められない不当若しくは違法な要求又は契約の適正な履行を妨げる妨害（以下「不当介入」という。）を受けたときは、当該不当介入を管轄する警察署長に通報するとともに、発注者に報告しなければならない。

2 受注者は、前項の規定による発注者への報告を行った場合において、不当介入を受けたことにより、当該契約につき履行遅滞等が生じるおそれがあるときは、発注者に履行期間の延長等を請求することができる。

3 発注者は、前項の規定による請求を受けた場合において、必要があると認められるときは、履行期間の延長等の措置を講じるものとする。

（補則）

第24条 受注者は、この契約書に定めたほか、この契約の履行にあたっては、関係法令及び岐阜市契約規則（昭和39年岐阜市規則第7号）を遵守するものとする。

2 この契約書に定めのない事項又はこの契約に関し疑義が生じたときは、その都度発注者と受注者とが協議して定めるものとする。

(適用除外)

第25条 前各条の規定にかかわらず、次に掲げる場合には、次に掲げる契約条項の規定は適用しない。

(1) 前払金を支払わない場合 第15条及び第16条